

時は満ちた

イザヤ52:7

マルコ1:14, 15

今年はコロナと共にもう半年過ぎてしまいました。日も長くなり夏至です。この時期は国によっては夏至の祭りと共に聖ヨハネの祭りが行われます。冬至がキリストの誕生を祝うのであれば夏至がヨハネの祭りであるというのは意味深長であります。また聖ヨハネ（洗礼者）の日（6月24日）は日本基督教団創立記念日でもあります。本日の週報の『牧師室から』にも書きましたが、教団が、洗礼者ヨハネのようにイエス・キリストの道を備え、グリュネバルトのイーゼンハイム祭壇画にあるように主を指し示すものであってほしいと願っています。

ヨハネは捕えられてしまいますが。それは王であるヘロデとヘロデアの関係を諷めたからです。そのヨハネが捕えられて投獄されますが、ヘロデアが娘サロメを用いてヨハネの首をとることとなるのです。イエス様はヨハネから洗礼を受けて、宣教活動を開始しますが、洗礼者ヨハネも悔い改めの勧めをしていたので時期や場所も重なっていたことかもしれません。ここであえて「ヨハネが捕えられた後」にイエス様が福音を伝えていたとあるのは、イエス様のヨハネに対する配慮であったのでしょうか。大分昔になりますが、以前私がある教区の議長とお話をさせて頂いた折に、その教区では伝道所を開所する際には、1キロメートル以内にある教団の教会には承諾を得るのが申し合わせとなっていると言われたのを思い出しました。伝道活動は信徒を得る自由競争ではないので、近隣の教会がともに力を合わせてその地で働いていくものでしょう。しかし単にイエス様がそのような配慮のあるお方であるということなのでしょう。ただそれだけのことでしょうか。

ここではもっと大切なことが示唆されているのです。それはヨハネが当時の支配層に捕えられたという緊迫した状態になっていることであり、イエス様もヨハネから洗礼を受けたものとして、支配層から目を付けられるようになったということです。ここで「捕えられた」という言葉は「引き渡す」という言葉の受け身ですが、この言葉は、イエス様の受難において、罪人の手に引き渡され、ピラトに渡され、ピラトが十字架に付けるために引き渡した、という時に用いられた言葉です。つまりヨハネが「捕えられた」ということがすでに後のイエス様の引き渡しの予兆を感じさせるのです。

イエス様がまず伝道を始められたのはガリラヤ地方でした。そこで弟子たちと出会いました。いわば出発点です。十字架にかかれ、復活された後に、弟子たちに指示されたのは、あなたたちはガリラヤへ行きなさい、そこで会おうということでした。つまり出発点でもあり、再出発の地でもあるのです。ガリラヤは地方であります。伝道戦略から言えばエルサレムのような都市で活動したほうが効率がよいのではないかと考えたりもしますが、イエス様はガリラヤという辺境で宣教を始めました。勿論それから何度かエルサレムに上京していますが、必ずしも成功したわけではありませんでした。その代わりお育ちになったナザレは別として、ガリラヤでの宣教活動はまずまず良かったともいえるでしょう。

イエス様は言われました「時は満ち、神の国は近づいた。」神の時、救いの時がイエス・キリストの出現によって訪れたのです。そして神の国が近づいた。今まで遠くにあった、関係の遠かった神の国がキリストの到来によって関係が近くなったのです。では神の国とは何でしょう。国というのは、もちろん無政府状態（アナキー）というものもありますが、普通に成り立っているものには支配者或いは支配する組織があります。神の国というのは神に属するものであり神様が支配される国です。イエス様が活動されていた当時はローマ皇帝が支配者であり、その属国のユダヤではヘロデが王でした。そのような世界に神の支配が近づいたのです。では今日の世界では何が支配しているのでしょうか。デモクラシー（民主主義）はその名の通り民衆が支配するという意味です。しかしどうでしょう。民主主義の模範ともいえるようなアメリカでは現代、大衆主義が台頭しているし、格差が広がっています。民主主義が限界に来ているのです。私どもが目指すのは各々罪ある人間が支配するのではなく、神様ご自身が支配される形態（セオクラシー）です。イザヤ書にもあるように「あなたの神が王とな」ることです。それが近づいたという良い知らせです。神の国が近づいたなら私どもは何をすべきか。リレーやマラソンを考え

てみましょう。先発の走者が遠くにいる間は次の走者は控えています、数メートルに近づくとバトンやタスキを受け取るために片手を後ろに伸ばし体制を整えます。「時は満ち、神の国には近づいた」のだから「悔い改めて福音を信じなさい」と主イエスは言われるのです。「神の国は本当に近づいたのか？」本当にそうなのかと疑問に思った人たちもいたことでしょう。イエス様はその良い知らせを信じるようにと言われます。福音はそれを聞いた人が信じて受け入れなければ伝えることができないでしょう。そうでなければ単なるうわさ話でしかなくなってしまいます。あの本を読んで本当に良かったということを実感しなければ、その本を人に勧めるのは難しいでしょう。何かいいらしいよ、では伝わりません。自分が信じたことを伝える、それが伝道です。またイエス様はこういわれています。悔い改めてから信じなさいと。ご存じのように悔い改めるというのは180度方向転換をするあるいは立ち返るといことです。これらは別のことのように思えますが実際には同じようなことです。なぜなら人は神様の導く道から反れてしまっている、方向を間違っている時に向きを変えなければならないからです。その向きは先に示された正しい方向です。そこに立ち返ることがつまり方向転換になるのです。角度が60度とか90度ではないかともいわれるかもしれませんが、神の示す道から反れた方向というのは皆同じです。正しい道に沿って進むか外れるかしかないので。すべてそれは考え方だけでなく生き方においてもです。人にとって今までの考え方やさらに生き方を変える、それも全く変えるあるいは立ち返るといのがいかに大変かとも思うのです。それを人の思いや自分の力でやろうと思っても困難です。神様によって変えられるという経験が必要なのです。神様によって変えて頂く、戻して頂く、そのように祈り願うのです。それが悔い改めの心です。そこから福音を信じるということが可能となるのです。そして伝道へとつながります。良い知らせを伝える者には伝える喜びがあります。悲しい知らせを伝えるのは気が重いものであります。しかしここで言う福音、良い知らせといのは誰にとっても良いものであり益となるものなのです。例えばある人が試験である学校に合格したとします。それは確かに良い知らせですが勿論本人や家族や友人など親しい人たちにとっての良い知らせです。ところがその試験に不合格であった人が聞けば素直に喜べないこともあるでしょう。しかしここで言われている福音、良い知らせとは神の福音であり神の良い知らせなのです。普く世に宣べ伝えるべき救いの知らせなのです。福音を告げるものは、平和を告げ、恵みを告げ、救いを告げます。これらは神の平和（神が支配する平和）であり、神の恵み（神様が与えてくださる愛）であり、神の救いです。

マルコによる福音書ではこの言葉「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」が最初のイエス様のお言葉です。イエス様の伝道がこの言葉でもって始められたということを肝に銘じておきたいと思えます。私どもが伝道する際には何をどのように語るのでしょうか。毎週主日ごとに礼拝では数十分の説教が語られます。しかしそれとは別に、巷の人に一言語りかけるなら何と申すのでしょうか。聖書には多くの珠玉のようなみ言葉があります。勿論聖書の言葉はどこをとっても一言一言神の言葉であり、どれもが等しく深遠で重みがあります。それでも今日お読みしたイエス様の最初のお言葉「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」は暗闇の中に差し込む一条の光であり、何ともいえない緊張感、緊迫感があり、目を自分の心のうちに向けさせる力を感じます。

イエス様は洗礼を授けてくれたヨハネが捕えられ、投獄されたことあるいは殺されたことを知ったかもしれません。そのとき何を思ったのでしょうか。怖気づいたのではないのです。「時が満ちた。今こそ福音を伝えるべきである。それが自分の使命なのだ。」そう確信したことでしょう。ご自身がヨハネのように捕えられる危険は承知していたことでしょう。イエス様は苦難の道を歩まれることを決意して宣教活動に入ったのです。命を懸けて宣教する、伝道するということを改めて思わずにはられません。今日、伝道については信教の自由が認められているこの国で、私どもが迫害を受け命をかけるというのはあまりないかもしれません。しかし知らず知らずに滅びの道を進んでしまう私ども自身そして隣人に対して、立ち返るためのみ言葉と救いの知らせを心に刻み伝えることは、魂の死活の問題です。今年はあと半年残されています。ウィルス感染による体の死の恐れですでに半分過ぎてしまいましたが、後半は魂の死の怖れにも目を向けたいと思えます。そのためにも今朝与えられたみ言葉を絶えず反芻していききたいものです。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」